

## はじめに

国際日本文化研究センター（日文研）では、1997年から、日本の妖怪文化を学際的観点から明らかにするという目標を掲げ、これまで4回に及ぶ共同研究会（「日本における怪異・怪談文化の成立と変遷に関する総合的研究」「日本人の異界観」「怪異・妖怪文化の伝統と創造」「怪異・怪談文化の伝統と創造—研究のさらなる飛躍に向けて—」）を組織して研究を重ねてきた。

また、これと連動するかたちで、科学研究費の交付を受けて、妖怪文化関連のデータベースの作成を大きな柱とした共同研究プロジェクトも推進してきた。

それらの研究成果については各プロジェクトの終了ごとに成果報告書を公刊するとともに、その成果であるデータベースも公開してきた。

本報告集は、これらの研究を国外からのアプローチも交えて総括し、今後の研究の方向を探るために、日文研において、2013年11月25日から27日まで開催した国際研究集会の記録である。

周知のように、日本の妖怪文化は長い歴史をもち、しかも豊かな内容を備えている魅力的な文化である。それは日本人のカミ観念・霊魂観の半身ともいべき性格をもっているにもかかわらず、さまざまな理由から、これまでともに論じられることが少なかった。これまでの一連の研究プロジェクトに参加された研究者たちは、この空隙を埋めるために、妖怪文化と真摯に対峙し、多くの示唆に富んだ研究成果を披瀝し、その結果、妖怪研究は飛躍的に進歩してきた。また、近年の通俗的・大衆的レベルでの妖怪ブームの後押しもあって、妖怪文化研究は日本に限定されたものではなく、グローバルな広がりを示し始めている。この国際研究集会の報告からも、そのあたりの様子をうかがい知ることができたのではなかろうか。

国際研究集会では、これまでの研究を総括するとともに、特に配慮したのは、次世代の研究を担うであろう若手研究者たちの研究であった。日本の妖怪文化の全体像や奥行きはまだ十分に究められていない。今後、彼らによってさらに明らかにされることを期待したい。本報告集は、その予感にうち満ちているはずである。

なお、この国際研究集会に先立って、公開のシンポジウムを開催し、小松和彦（日文研所長）、京極夏彦（作家）、マイケル・フォスター（日文研外国人研究員、インディアナ大学准教授）の三名による基調講演と、その後、山田奨治（日文研教授）を司会者とし、上記三名に加えて、常光徹（国立歴史民俗博物館教授）、マティアス・ハイエク（パリ大学准教授）によるディスカッションが行われた。

小松 和彦